谷川の水音はほとけのこえ
山のすがたはほとけのからだ

渓声は便ち是れ広長舌
山色は清浄身に非ざるなし
ー正法眼蔵よりー

古来、山へ登るには「六根清浄、六根清浄」と唱えながら頂きをきわめました。これは、身心を浄め浄めして山へ登らせてもらうという気持ちの現れです。

自然は我々の生まれ来た所、そしていずれは帰って土となる所です。大自然は神聖な場所、生き物としてあがめてきた所です。

冒頭の句は中国の詩人、蘇東坡という人の詩の一部です。自然に対する仏教の見方がのべられています。

自然から湧き出づる谷川の水音に人生を語る説法を聞き、眼前に広がる山に真実を体得した人の姿を見取る。即ち人間根性を投げ出し、澄んだ心で自然に向かった時、初めて一体となったと見るのです。

ある酪農家から「牛の言葉がわかる」とお聞きしたことがありました。これはまさに牛と一体になった心境かと思います。

昨今の自然界のようすはどうでしょうか。大気・大地に対する虐待は止まるところを知りません。しかもそれは地球規模による破壊であります。この自然に対する破壊はいかにしてもくいとめなければなりません。

汚染された自然に真理を感じ取るのはいかにも不自然です。清らかな大自然の中にこそ生きる力が秘められているのです。説法があり、真理の姿があると。

仏教的宇宙秩序を求めようとする心は、自然を大切にする心にも通じ、それはまた自然とともに生きようとする姿ではないでしょうか。

谷川の水音は
ほとけのこえ
山のすがたは
ほとけのからだ

原文

渓声は便ち是れ広長舌
山色は清浄身に非ざるなし
（正法眼蔵）

曹　洞　宗
神奈川県第二宗務所
第五教区　　布教部・出版部

解説

この句は『正法眼蔵』の中の「渓声山色」巻に出ており、蘇東波が作ったものです。蘇東波は、北宋の詩人で、蘇軾ともいいます。

六根は、感覚や意識を生じさせる六つの器官、眼・耳・鼻・舌・身・意の総称です。ですから、六根清浄とは、六根から生ずるあらゆる煩悩を断ち切って、心身を清らかにすること、となります。

行者さんたちは、これを唱え、神聖な山(自然)での修行に臨み、災害なく登山できるように祈願したものとも言われています。

私たちの御先祖様は、自然を人間と対立するものとは考えていませんでした。むしろ私たちは、自然の営みの中の一つとしてその中に生かされていると捉えていたのです。すなおな気持ちで自然に接するとき、大自然のありようそのものが「ほとけさま」の教えであると、おそらく蘇東波も受け止めたのではないでしょうか。